南京大学文学院とのミニシンポについて

土屋昌明

本研究グループは、2013年3月25日午後3時から、南京大学仙林校区文学院第二会議室にて、南京大学文学院との共同ミニシンポ「中日學者“中古道教暨道教文獻”研討會」を開催した[*1]。以下、趙益教授の発言の要旨のみ紹介したい。

道教文献の文献学的研究は、道教および道教史に奉仕するだけでなく、文学や文化の研究にとっても必要性が高い。しかし従来、道教への軽視と道教文献の複雑さがあいまって、この方面の研究は中国ではそれほどおこなわれてこなかった。とくに『道蔵』所収の道教文献は、時代・作者などが不明であり、文献学的究明が可能であるかおぼつかないありさまであった。しかし、この百年の日本の研究者および近年の中国の研究者の成果、そしてシッペール（K.M.Schipper）らの『道蔵通考』などによって、道教の文献学的研究は実現可能だということが証明されてきた。そこで近年、道教文献を古典文献学に位置づけるような思考を試みている。

まず道教文献には特殊性があるとしても、古典文献の基本性質[*2]はあてはまるであろう。では、宗教文献としての特殊性とはなにか。第一に、作者および内容の時代・編纂の時代・転写の時代といった基本的属性がよりはっきりしないこと。とくにいわゆる啓示による文献は、無名の人物や集団による創作であったりするし、さらにそれが時間を経て後人による改竄がおこる。第二に、文献そのもの、文献の成立過程が神秘化されること。ある道教経典はある作者が著作したといわず、ある神がもたらしたとか、ある洞窟で獲得したといわれる。したがって、道教文献学において古典文献学の基本性質だけをあてはめて考えることはできないし、また古典文献学とは離れている特殊性の第二の問題を無視することもできない。

この点を考慮するためには、「経群」「経系」「経蔵」という三つの観点に留意すべきである。まず「経系」について。道教史においては造経運動があったが、そのときに三皇系や霊宝系や上清系といった経系が生じた。道教の教派の名称はこうした経系に由来している。「経蔵」は「道蔵」のことである。「経群」とは、造経運動において相互に関連するテキスト群があったことをいう。こうしたことは、道教文献だけでなく、仏教やキリスト教の文献にも見られる。これには、テキストの何らかの原型があり、それはそのまま伝えられた場合もあるが、その原型がオーラルであると、それが書写されるプロセスが生じる。また、その原型を伝えた人物が整理

注1…発表者と発表題目は以下のごとくである。
基調講演：趙益「經群・經系・經藏—中古道教文獻的“還原”與“重構”」
酒井規史「童初正法之神話—被覆蓋的傳統」
廣瀬直記「道教經典中的真偽問題—以陶弘景的信仰為例」
土屋昌明「王屋山信仰之演變—洞天、道教、民間宗教」
発言時間は20～30分とされた。
以下に趙益教授の近著をあげておく。
『古典術数文献述論稿』中華書局、2005年。
『六朝南方神仙道教与文学』上海古籍出版社、2006年。
道教典籍選刊『真誥』趙益点校、中華書局、2011年9月。
『六朝隋唐道教文献研究』鳳凰出版社、2013年3月。

注2…それは、つぎの三点である。
①つみかさなり。長期間の成立過程において、つみかさなり、あるいは沈澱していく。
②つくりなおし。個別に流通していたものが集められて一書とされる。
③ひきうつし。相互に襲用しあい、関連し合っている。
なお、これ以下の注は趙益教授の発言にもとづく。

を加えたり教義化したりするプロセスが生じる。それによって、一つのテキストから複数のテキストが形成されていく。そうした複数のテキストは、差異が少ない場合もあるが、差異がひどく大きな場合も少なくない。最後に、複製がおこなわれ、流通するプロセスがあり、そこでも差異が生じる。これらは、古典文献学でいわゆる「異本」ではないから、これに「経群」というタームを与えたい。

経群の例として、服気吐納経群がある。『道蔵』にみえる早期道教文献には、服気や吐故納新に関する文献が多い。これらの内容やテキストは相互に関連しており、中心的なテキストが存在するようである。また、霊宝五符経群は、中心的なテキストの周囲に、関連が非常に濃厚なテキスト群が存在している[*3]。ほかに、上清大洞真経群では、原型があって、その一部から大洞真経と大洞玉経が生じた[*4]。ほかにも、玉清隠書経群がある。

このような経群の生成と変容には、それがおこなわれた地理的な条件や、宗教教団の信仰が異なっている情勢のほか、農民起義や千年王国運動などが複雑に関わっている。また、六朝時代の茅山のように、南方の道教で教派の進展や教義の深化があって、新たに経典を編纂しなおしたり、王霊期のように偽造したりする状況もある。それが「経系」となるのであり、その意味で「経系」は「経群」の結果といえるが、両者は並立関係でもある。

「経系」は自分たちの教派と関わるため、教義化が進められるものである。三洞四輔はそれを考えるのに役立つ。『老子』は道教が借用してきたものであるから経系からはずし、太平経系・金丹経系（太清経系）・三皇経系・霊宝経系・正一経系・上清経系が想定できる。ただし、これらは相互に借用をしている点は留意すべきである。このように考えると、魏晋南北朝の教派は「経系」で分類した方が理解しやすいと思われる。

最後に、「経蔵」については、三洞四輔の成立は道蔵を意識していたと思われる。もちろん三洞四輔は一種の分類基準であって編纂基準ではない。しかし、それが「経蔵」に理論的根拠を与え、体系化への道をつけた意義は高く評価すべきである。「経蔵」の成立過程には、内的原因のほかに外的原因があって非常に複雑である[*5]。こうした宗教文献の経群・経系・経蔵の生成と変容の内在的な論理をふまえたうえで、文献を経群へと還元していき、早期の原型の状況を示すとともに、生成と変容のプロセスを再構築する。つまり従来の研究では、経典の変容の一部分について成果があがっているが、それを経群・経系・経蔵という一つのシークエンスで考えようとするものである。したがって、こうした研究は文献学にとどまるものではなく、宗教史や文献学などの総合的な研究となる。

以上、趙益教授の発言の要旨をまとめた。

注 3…これについては、小林正美教授が『六朝道教史研究』で扱っている。

注 4…これについては、石井昌子教授や麥谷邦夫教授が詳しく研究している。

注 5…これについては、大淵忍爾教授が『道教とその経典』ですばらしい研究をしている。ただ、経系から経蔵へのプロセスにおいても、非常に多くの変容があるので、研究すべき課題は多い。